

ま え が き

私たちは、昭和51年度から「人間性豊かな子どもの育成」を研究主題として掲げ、今日まで研究実践を重ねて来ている。その中で、51年度においては、再度、子どもの現実の姿に目を向け、人間の人間としての豊かさを求めるために、教科、道徳、特活の視野から、子どもたちの知情意体の調和的な発達を考え直したのである。そのために、もっと自由な立場から、自己実現を図る場を考えて、総合学習の時間（ α の時間）を設定し、実践を試みて来た。これは、一つの目標に向かって、創意工夫のある活動の過程を通して知情意体の相互関連による豊かな価値創造をめざす意図のもとに行ったものである。その実際の活動に当たっては、本校の子ども達の発達上の現実的な課題を見つめ、次の3点を重点内容とした。

- ① 体験を通して学び、創造的に発展させるための活動（多様な経験を通して創造的な生活を生み出す）
- ② 人間としての優れた感覚を磨く活動（感覚を鋭く磨く）
- ③ 集団の中で人間的な触れ合いを求め合うための活動（連帯意識の育成・個と集団のあり方を考えさせ、つくらせる）

その結果、確かに、一つの目標に向かって、生き生きとしてとりくむ子どもたちの姿が見られ、経験や活動の幅も幾らかは広めることもできた。人間としての創造活動を通して感覚を磨く機会ともなり得たし、縦割り集団の中でひとりひとりの心が触れ合うよさも感得させることができたと考えている。しかしながら、これらの活動について反省してみる時、全て手放しでは喜べないことにも気がついたのである。それは、もっと人間そのものの中の奥深くにまで喰い入り、そこから再度噴き出してくる豊かな人間のエネルギーになり得る内容と活動を求めなければならないという点に気づいたことである。

そこで、人間づくりの土台ともなる人間の資質の正常な発達をめざす視点として、イギリスのブライアン・ウェイによって提唱されている「ドラマによる表現教育」の考えをとり入れることとし、昭和53年から総合学習の時間（昭和54年度からは「景雲アワー」と改称）の中に「自己表現力開発の時間」として、全時数の3分の2をあてることにした。

この時間では、ひとりひとりの子どもが、人間として解放され、そこから生まれ創り出される個性豊かな活動を求めようとするものである。そのために、自

分自身をさらけ出し、自己に対する誠実さ、素直さ（相手に対しても同様に）を求めさせ、そこから創造される感情豊かな活動を組織することによって、人間性豊かな子どもへのアプローチを考えようとしたものである。

ジェラルディン・Ｂ・シックスは、教育におけるドラマの目的を「子どもの心を開き、想像力や言語能力を刺激し、人間的成長をうながし、発見に対する熱意を絶えずかきたてること」と述べ、その価値を「ひとりひとりの子どもが感動を体験することができる点にある」と言っている。

また、ブライアン・ウェイは「ドラマを始めるということは、各人が持っている資質を発見し、開発することを助けることでなければならない。」と述べている。

私たちは、子どもの創造的・自己実現活動を充実させるために、これらのドラマによる表現教育の考え方や手法に多くのものを学んでいる。

子どもたちが心を開き、自分を出し切り、自己変容していくためには、ひとりひとりが豊かに自己を表現していく能力を身につけなければならない。

そのためには、学校教育の全領域にわたって、意図的、計画的に取り組む必要がある。この点から、本校では主に「学校裁量の時間」を活用して、ドラマづくりを通じた自己表現力開発のための学習を試みてきた。

その間、玉川大学の岡田陽先生、広島大学の黒田耕誠先生、勝場勝子先生には、創造教育、表現教育についての理論的な指導と共に、具体的な指導の手ほどきを身をもって指導いただき、方向性を示していただいた。

昭和53年度においては、手さぐりながら、その実践化をはかり、年間指導計画を作成し、自己表現活動の充実をめざす第一歩を踏み出すことができた。

実践が着実に歩み始めると、指導計画の不充分さと不便さが指摘されるようになり、手軽に容易に活用できる資料集の必要性が話題となり、十分とは言えないが、これまでの実践を整理して活用資料を作成することにした。

本書は、ブライアン・ウェイの提唱する人間の資質の開発に関する人格の諸相の7つの視点（①集中 ②感覚 ③想像 ④身体 ⑤スピーチ ⑥感情 ⑦知性）を生かして、実践の資料となるようまとめたのである。

集録されているものは、その一部ではあるが、これを基礎に、指導者が充実・発展を求めていくための素材・展開例として活用していくことが、本書の主旨にそうものであることを確認しておきたい。

本資料集の活用にあたっては、次の4点を特に留意したい。

- 低・中・高学年別に便宜上編集してあるが、子どもたちの自己表現活動に対する学習経験そのものが問題であり、年令、学年段階を直接問題にする必要はない。そのため、子どもの実態に即して、そこから出発することが大切である。
- 題材についての視点の分類については、ここでは、集中・想像・身体のコントロール・身体表現・スピーチ・劇づくりの6つに区分してある。
題材名の後の()内にその視点が明記してあるが、視点が1つだけに限った活動は少なく、活動の性格上それぞれが関係し合っている活動が多く、主要なものだけを掲げてある。
- 題材は分類の順序に並べてあるが、これだけを順に学習していくというものではない。同じ素材で、あるいは素材を変えてくり返し学習していくことが重要なことである。また、学校裁量の時間だけに限定せず、学校教育全般にわたって、その中でたとえ5分間でもよい日常的にくり返し行うことも大切に考えたい。
- 自己表現活動は子どもの内面にかかわる問題であり、そのことを重視するものであるから、外側に表れる表現そのものの上手、下手は問題にすべきではない。このことは、自己表現活動の学習を実践していく上で、一番重要なポイントになる。その意味からも、子どもひとりひとりの自己評価活動が重要な課題となる。

目 次

まえがき

〔低 学 年 編〕

〈集 中〉-----	4 ~ 10
1. いくつ聞こえるかな	2. どこまで聞こえる？
3. わたしは誰でしょう	4. ピーターパンとワニ
5. ことばあてゲーム	6. よく見てごらん
7. 形あてゲーム	8. たすけあい たすけあい
〈身体のコントロール〉-----	11 ~ 20
1. むき足さし足のび足	2. ふたりでそろって
3. らかんさんあそび	4. あんたがたどこさ
5. ボールであそぼう	6. 何を渡しているのかな
7. ゴムひもをつかって	8. どれだけ動かせるかな
〈想 像〉-----	21 ~ 25
1. お話のつづきは？	2. 絵から生まれたお話
3. 音出しあそび	4. 魔法の新聞
5. みたてあそび	
〈身体表現〉-----	26 ~ 27
1. どんな動物かな	2. ジェスチャーあそび
〈スピーチ〉-----	28 ~ 31
1. わたしはアナウンサー	2. それからどうになりました
3. もしも机が話せたら	4. お店やさんとお客さん
〈劇あそび〉-----	31 ~ 33
1. 一本橋	

〔中 学 年 編〕

〈集 中〉-----	34 ~ 42
1. 何が聞こえる？	2. これはなんだ？
3. 何が見えるだろう	4. あれ？どこにあったかな
5. 大地を感じよう	6. 航空ショー

〈身体のコントロール〉	43 ~ 47
1. 熱さ冷たさを感じる	2. ビーチボール投げ
3. もう一人の自分	4. 大きな木
〈想像〉	47 ~ 48
1. 流れついた手紙	
〈身体表現〉	49 ~ 56
1. タンポポの旅	2. 海底のようす
3. あの人になって	4. シャボン玉遊び
5. 宇宙遊泳	
〈スピーチ〉	56 ~ 62
1. お話をつくろう	2. 不思議な不思議なおしゃべり
3. トピックススピーチ	4. もし ~ になったら
5. 無人島を音であらわそう	
〈劇づくり〉	62 ~ 79
1. みんな一緒に楽しいな	2. サーカス
3. 砂漠の隊商	4. カレンダーの中の世界
5. サンタクロース	6. 帰り道
7. 働かって素敵だな	8. 秋祭りのスケッチ
9. あの時のあの場面	

〔高 学 年 編〕

〈集 中〉	80 ~ 83
1. 鏡遊び	2. 音あて遊び
3. なわの無いなわとび	4. うるさいぞ
5. 後追い朗読	
〈身体のコントロール〉	84 ~ 87
1. 猫のひなたぼっこ	2. 種の一生
3. 氷の彫刻と日光	
〈想像〉	88 ~ 91
1. レコードを聴いて	2. 吹き出し遊び
3. ジェスチャー遊び	4. 物と語ろう
〈身体表現〉	92 ~ 96
1. すてきな彫刻	2. 生きている彫刻
3. ロボットの掃除	4. ストーリー・プレー

〈スピーチ〉----- 97 ~ 103

- | | |
|--------------|----------|
| 1. やあ、こんにちは | 2. 反対が好き |
| 3. アフレコ遊び | 4. 店頭売場 |
| 5. つるときつねの招待 | |

〈劇づくり〉----- 104 ~ 111

- | | |
|--------------|------------|
| 1. わたしは誰でしょう | 2. めんどりペニー |
| 3. 大きなかぶ | 4. にわか雨 |
| 5. さあ、出かけよう | |